

虞美人草「欽吾の母が妾」説

Junko Higasa 2013.11.15

さて、「藤尾の母が妾」説を書くと、今度は「欽吾の母が妾」説を考えてみたくなる。根拠は欽吾が継母を尊重していること。継母が藤尾に跡目を継がせたがっていること。欽吾と藤尾は3歳違い。順当に考えれば先の子が本妻の子と思えるが、本妻というのは家柄に見合った相手をもたらすものである。対して妾というのは恋愛の気持ちが優先して持つものである。妾との交渉の方が多くて、妾の方が先に懐妊したということもあり得る。あとから本妻にも子供が出来たが、あいにくと女の子である。法律上家督継承権を持つのは男子である。そう考えると、甲野さんが継母や藤尾に遠慮して、財産を譲って家を出ようと悩むのも頷ける。また藤尾の母からすると、本来は本妻の自分の方が法律上ではなく、人情の上で立場が上だと思えるのに、妾の子が男子であるがゆえに家督を譲らなければならない。それは悔しい。そこで本妻の子である藤尾に何とか家を継がせたいと願う根拠も成り立つ。どちらが本妻で、どちらが妾か。妹の藤尾は亡くなってしまった。本妻の子としての欽吾は、その権利と義務で継母の面倒を見ようとするのか。それとも妾の子としての欽吾は、憚ることなく家督相続人として継母の面倒を見ようとするのか。それは社会制度と複雑に絡み合う。ただ一つ言えることは哲学者：甲野欽吾は法律ではなく、人情で継母に相對するだろうということだ。